

このコーナーは、町内で行われたイベントや活動、町民の皆さんの身近で起きたちょっとした出来事など、1カ月のまちの話題を紹介するページです。



殉職から100年  
井上耕介氏慰霊祭

10月10日、100年前に町内で猛吹雪に遭い殉職した釧路税務署職員、井上耕介氏の慰霊祭が片無去の慰霊碑前で行われました。

この慰霊祭は井上耕介先生奉賛会(室崎正之会長)が主催したもので、町や税務署職員など約50人が出席しました。

釧路税務署に勤務していた井上耕介氏は、明治41年3月、税法改正を知らせるため、釧路市から厚岸町へ向かう途中に片無去付近で遭難しました。その際、重要書類の入ったかばんを守るために、自らの外套(コート)で包み、その上にわが身を伏して殉職しました。

加藤敏夫釧路税務署長は「命を懸けて職務を全うしようとした精神を永遠に伝えることを誓います」と、追悼の言葉を述べました。

なお、今年5月には100年を記念し、50本の桜が植樹されています。

## 最後の学校祭で練習の成果を発揮

来春閉校となる上尾幌小中学校(菅 秀紀校長)と尾幌小中学校(藤井 来ました)で、最後の学校祭が行われ、



10月12日に行われた上尾幌小中学校の学校祭では、5人の児童生徒がそれぞれ朗読や自由研究、落語などを披露し、会場から大きな拍手を受けました。

18日には尾幌小中学校の学校祭が行われ、18人の児童生徒が歌や器楽、劇など練習の成果を披露しました。

学校祭のテーマは『キセキ』で、今までの軌跡を生かし、奇跡のような素晴らしい学校祭にしたいという願いが込められていました。

両校とも最後の学校祭ということで、例年以上に地域の皆さんが訪れ、子ども達の成果を見届けました。



## 釧路星園高校生徒がサンマの缶詰作りに挑戦

10月10日、今年度で閉校となる釧路星園高校(館山昭校長)の3年生67人が、厚岸水産高校(松村裕史校長)を訪ね、サンマの缶詰作りを体験しました。

この日は2班に分かれ缶詰作りを行いました。女子生徒ということもあり、サンマの下処理なども手際よく行い、楽しい雰囲気の中、缶詰を作り上げました。

## 地元食材の給食に大満足

10月14日、小中学校の給食に、厚岸産サンマやジャガイモなどを使った給食が出されました。給食センターが厚岸漁協と釧路太田農協から無償提供を受けた食材を用い、地元産の『海と山の幸』を同時に提供した初めての給食です。



厚岸漁協から提供を受けたサンマはショウガ煮として、釧路太田農協から提供を受けた、ジャガイモ、ダイコン、カボチャは『まきばなべ』として、休校日の学校を除いた全13校(約1千50食)に出されました。

このうち厚岸小学校2年生のクラスでは、給食に先立ち食育の授業が行われ、給食の効果や使われている材料などについての説明がされました。

子ども達は、サンマは骨も丸ごと食べ、笑顔で給食を残さず平らげました。

## 自分の体力に応じ一生懸命走りました

10月13日の体育の日、第13回町民ファミリーマラソン大会が開催され、39人が参加しました。



このマラソンは、自分の体力に応じた距離を走るもので、体力の向上と世代間の交流や親睦を深めるために行われます。

当日は絶好のマラソン日よりで、参加した全員が完走しました。

## 戦没者の霊を慰め恒久の平和を誓いました

10月5日、厚岸町戦没者追悼式が社会福祉センターで行われ、本町出身の243人の戦没者の霊を慰めようと遺族や関係者など90人が参列しました。

若狭靖町長が「不戦の誓いを新たにし、恒久の平和を確立することが、私達一人ひとりに課せられた重大な責務であると決意しているところで、戦没者や遺族の皆さんに報いる唯一の道」と式辞を述べた後、全員で黙とう。南谷健町議会議長らに続き、遺族会の稲井正義会長は「戦争の悲惨さと、今日の繁栄には戦没者の献身的な犠牲があったことを、次の世代へ伝えていきます」と追悼の言葉を述べました。

追悼詩吟が行われた後、参列者全員で祭壇に花を捧げました。

## 命のぬくもりを実感 思春期ふれあい体験学習

10月17日、厚岸潮見高校(高橋由岐子校長)で、2年生50人を対象に『思春期ふれあい体験学習』が行われ、実際に赤ちゃんに触れて命のぬくもりを実感しました。

この学習は、事前に思春期の性の問題を保健師の立場から説明する『思春期講座』と、将来親になる高校生に、生命尊重の意識を深めてもらう『思春期ふれあい体験学習』からなり、2日間にわたり行われました。

ふれあい体験の当日は、町内の5組のお母さんと赤ちゃんが同校を訪問。保健師から赤ちゃんの発育などについての説明を受け、お母さんからは育児についての話を聞き、実際に赤ちゃんに触れたりしました。

恐る恐る赤ちゃんを抱っこしながらも、生徒達はみんな笑顔。「将来は私も子どもが欲しい」と、お母さんのような笑みを浮かべて話している生徒もいました。

